フランスでの日本語教育とCEFR及び先進事例(大阪大学外国語学部)

山崎吉朗

1. はじめに
2. フランスの高等教育及び中等教育における日本語教育と CEFR
2.1. フランス訪問準備
2.2. フランス訪問記録
2.3. 成果及び今後に向けて
3. 先行事例（大阪大学外国語学部）
3.1. 経緯
3.2. 現状
４. 調査を終えて

1. はじめに

本報告では次の 3 点について述べる。

1　フランスの高等教育における日本語教育と CEFR

2　フランスの中等教育における日本語教育と CEFR

3　先行事例として、大阪大学外国語学部の外国語教育と CEFR

1、2 に関しては、実際に訪問した聞き取り調査及び授業見学でわかった事を示す。3 に関しては、大阪大学外国語学部を訪問し、CEFR 導入の中心にいる真嶋潤子氏（日本語教育）にお話を伺った。先行的な導入過程と、すでに実施している到達度評価制度について記す。

2. フランスの高等教育及び中等教育における日本語教育と CEFR

フランスの高等教育及び中等教育では CEFR がどのように関連付けられているか、日本語教育を通して調査した。以下にその事前調査と訪問調査について記す。

2.1. フランス訪問準備

(1) 訪問先決定まで

本研究の為にフランスを訪問することは 2009 年 12 月に決まった。訪問時期は 2010 年 3 月で、下記の理由で日本語教育をキーワードとして調査を行うことにした。

1. 国際交流基金の JF 日本語教育スタンダード（後述）が正式発表される時期であった。
2. フランス在住の教え子が東洋言語文化研究学院、通称イナルコ（以下イナルコ）[1]で講師をしており、現地での調整がつけやすい。

[1] INALCO（Institut National des Langues et Civilisations Orientales）、フランス国立東洋言語文化研究学院

3. 筆者の複言語教育研究会[2]に参加している国際文化フォーラム[3]の活動の中心に日本語教育があるのでその系統をたぐって短期間で有効な調査を行うことが可能である。
4. 日仏高等学校ネットワーク Colibri[4]（以下 Colibri）で培ったつながりを活用して、中等教育の状況も調査することができる。

訪問調査の実施が決まったのは 12 月 21 日（2009 年）だった。訪問調査そのものは 2 月ないし 3 月なので慌てる必要はなかったのだが、予算執行の関係で急ぐ必要があった。暮れ、正月の休みをはさんで 1 月になったらすぐに日程や予算の決定が必要だということで 12 月 26 日からフランスに連絡を入れた。連絡先は下記の 4 箇所である。

1. パリのイナルコの日本人教員（教え子）
2. リヨンのアンペール高校のフランス人教員（Colibri での交流）
3. リヨン第 3 大学のフランス人及び日本人教員（Colibri の設立者及び古くからの知り合い）
4. エックスアンプロバンス大学のフランス人教員（Colibri での交流）

すでにクリスマス休暇に入っており、年内には返事はなかったが、ともかく何らかの形の訪問は可能であろうと考え、航空機や宿泊先の手配だけを先行して始めた。前述のように、日程や予算だけは 1 月半ばに決定していないといけなかった。

年があけて 1 月 5 日にようやく 1 の教え子から連絡が来て、訪問の相談が始まった。教え子はイナルコの他にパリ第 7 大学の講師でもあることがわかり、パリ第 7 大学も訪問することが決まった。結果的にはこのパリ第 7 大学の方で多くの情報を得ることができた。その後リヨンからも連絡が届き、パリとリヨンを訪問することを決めた。

かくして、1 月 5 日に日程を決定し、1 月 8 日には航空券を購入し、何とか手続きを間に合わせることができた。申請した後にエックスの先生からも受け入れ可能という連絡が届いたのだが、すでに日程を決めた後だったので断念した。

(2) 事前調査

フランス側と連絡を取ると共に日本でできる調査を進めた。

まずは、日本語教育に関するホームページの情報を国際文化フォーラムから入手し、下記の充実したホームページでフランスにおける日本語教育の概略を知ることができた。

---

[2] 筆者の所属している財団法人日本私学教育研究所で 2007 年から継続している研究会。フランス語、ドイツ語、英語、ポルトガル語、中国語、韓国語、日本語教育を専門とするメンバーで組織し、複言語教育の研究及びその推進を協議している。

[3] 1987 年 6 月 22 日に外務省の許可を得て設立され、2011 年 4 月 1 日に公益財団法人に移行した。定款には「我が国と諸外国の児童及び青少年を対象とした外国語教育及び多様な文化についての理解を促進するとともに、教育及び文化の交流を推進する事業を行い、もって児童及び青少年の相互理解と人間形成を図り、新たな国際社会の発展に寄与することを目的とする。」とある。

[4] 2003 年にフランス大使館の意向を受けて設立し、フランス語で日本語を学習している高校、日本でフランス語を学習している高校を加入校として、短期、長期留学を取りまとめ、推進している。

ヨーロッパ日本語教師会

http://www.eaje.eu/cefrproject.html

ヨーロッパにおける日本語教育事情と Common European Framework of Reference for Languages

http://www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/euro/pdf/ceforfl.pdf

ヨーロッパ各国の言語教育と日本語教育

http://www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/euro/pdf/02-2.pdf

日本語教育全般に関する情報（教育機関検索もあり）

http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/area.html

フランスの日本語教育に関する情報

http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2009/france.html

2 つめから国際交流基金の web である。2 つめの「ヨーロッパにおける日本語教育事情と Common European Framework of Reference for Languages」は 2005 年に刊行されたものである。CEFR の構想段階から日本語教育への適用を検討し、研究が進められている。2005 年 1 月段階で次のように明記している。

「大きな変動期にあるヨーロッパで、日本語教育は関係ないと、蚊帳の外にいるわけにはいかない。仲間に入らないか、と誘われるのを待っていては、いつまても仲間には入れてもらえないたろう。存在を主張し、自分か仲間に入ることの価値を訴えていく必要かある。そのためには、同等の知識を有し、相手の土俵て戦えるようになるための努力をしなけれはならない。日本語教育も、国際的に比較可能で、明瞭な能力評価基準を持つ時期ではないたろうか。」

“国際的に比較可能て、明瞭な能力評価基準”というのは CEFR との関係で記述されている。たいへん早い段階での研究が今の JF 日本語教育スタンダードにつながったと言えるだろう。現場ではどうであろうか？現場はどのようになっているのかが今回の調査となる。パリ第 7 大学でコーディネートして下さった大島弘子氏は上記の著者の一人である。

一方、現場情報として、教え子との連絡で下記のことがわかった。

CEFR はフランスの日本語教育者たちもかなり注目しているというより、注目せざるを得ない状況である。しかし、すでに中国語などに遅れをとっているように思われる。2 年半前の国際交流基金主催の欧州日本語教師会の研修旅行でも CEFR の話は多く出ており、フランス日本語教師会でも前年には CEFR をテーマとして勉強会が開かれた。JF 日本語教育スタンダードが公開されるし、次の年から日本語能力試験も CEFR の考え方を取り入れた新形式となる。そのような動きを踏まえて、5 月にはリヨンで行われる教師会主催のシンポジウムでは「日本語教育の動向と展望ー評価をめぐって」というテーマに決まったばかりである。

このような状況を事前に知ることできた。

(3)　JF 日本語教育スタンダード

前述のように準備の段階ですでに JF 日本語教育スタンダード[5]の暫定版は公開されており、まもなく、正式版が発表されるというところだった。出発前に国際交流基金と連絡を取り、関係者からの話を聞く計画を立てた。国際文化フォーラムを通して連絡を取ることが可能だった。

国際文化フォーラムから根津氏を紹介されて連絡をとった。根津氏は JF 日本語教育スタンダード作成には直接関わっておらず、教員の養成部門で仕事をなさっていることだったが、関係者にすぐに連絡を取って下さった。しかし、ちょうど発表直前で関係者は多忙を極め、とても時間は割くことができないということで断念した。あの大プロジェクトの担当者は極めて少ない人数と聞いて驚いた。

JF 日本語教育スタンダードはその内容について次のように説明している。

『JF スタンダード 2010』では、まず、日本語を使って何がどのようにできるかという能力に重点を置き、日本語の熟達度のレベルを提示しました。また、学習過程を記録し保存することの大切さを提案しました。多種多様な日本語教育の現場がいわば同じものさしを使うことで、世界中のどこで日本語を勉強していても / 教えていても、今自分が学んでいる / 教えているレベルがどこにあるかを知ることかできるようになります。また、熟達度を評価し、言語的・文化的体験を記録し振り返ることによって、課題遂行能力と異文化理解能力を育成し評価することかできます。進学や留学、就職などで人が移動する際にも、それまでの学習成果や熟達度を正確に伝達できるようになります。」

また、CEFR を参考にして作成していることについて次のように解説している。

「JF スタンダードは、ヨーロッパの言語教育の基盤である CEFR の考え方を基礎にして作りました。（中略）JF スタンダードを用いることにより、日本語の熟達度を CEFR に準じて知ることができます。」

Can-do リストに関しても、CEFR と対比して日本語で示されているだけでなく、「みんなの Can-do サイト」では、コースデザイン、授業設計、教材開発など、「Can-do」を使った日本語教育実践をサポートする仕組みになっている。

先進的な試みと言うことができるだろう。

今後は具体的な実践事例に注目していきたい。

(4)　コンピエーニュ大学

2007 年のフランスにおける教員研修の調査に行った時に知り合ったコンピエーニュ大学の日本語教育担当栗木氏が偶然今回の調査直前に休暇で帰国され、コンピエーニュ大学の日本語教育の状況を知る事が出来た。

コンピエーニュ大学は理系の大学である。日本語以外の特にヨーロッパ系の言語では CEFR との関係づけがあるようだが、日本語教育についての関係づけは行われていないということであっ

[5] 国際交流基金の「JF スタンダード」からすべてダウンロードできる。http://jfstandard.jp/top/ja/render.do

た。出発前に一つの大学の状況を知る事が出来たのは有益であった。

2.2. フランス訪問記録

2010 年 3 月 11 日から 18 日までの訪問調査を行った。

(1)　日程

今回の訪問日程である。

3 月 12 日（金）

イナルコ訪問

3 月 15 日（月）

アンペール高校訪問

3 月 16 日（火）

リヨン第 3 大学訪問

17 日（水）

パリ日本館訪問

18 日（木）

パリ第 7 大学訪問（パリ第 7 大学の教育について）

19 日（金）

パリ第 7 大学訪問（Oxford 大学とのテレビ会議見学）

ラシーヌ高校訪問

今回の訪問の目的は高等教育と共に中等教育の話を聞き、授業を見るということだった。高等教育と中等教育の授業の違いを見たいと思っていた。後述するが、両者の違いはなかなか興味深く、目的の一つを達成したと考えている。やはり実際の授業を見ることには大きな意味があった。

(2) 高等教育の調査

1　イナルコ

対応者（敬称略　以下も同様）

マリオン・ソーシエ（アグレジェ、社会学）、上田眞木子（助教授、近代文学）、後藤由美（日本語講師）

内容

聞き取り、授業見学

日本語を話すフランス人の大半がイナルコでの日本語教育を受けている。伝統的に、在日フランス大使館で日本語を話せる大使館員の相当数がイナルコでの教育を受けていると言ってよいだろう。その意味でもたいへん興味があって訪問した。ただ、イナルコは伝統的な日本語教育で、

書く事や文法を重視し、コミュニケーション中心の授業とは異なると聞いていた。現在、場所は移転して新学生街とも呼ばれている Tolbiac にある新校舎だが、訪問した時はパリ第 9 大学（通称ドーフィンヌ）に間借りしているように設置されていた。フランスの日本語教育の中心としては恵まれた設備とは言えなかった。昨年（2011 年）の秋にようやく移転した。校舎が変わり、講義にも変化が出たのかどうか、今後の調査が必要である。

見学した授業は下記のように初級から上級までの授業である。重なっている授業もあり、半分だけ見学したものもあった。

10h30 a 11h30	lexicologie	2 年生	上田先生
10h30 a 11h30	version	3 年生	Saucier 先生
11h30 a 13h	analyse et traduction	1 年生	Saucier 先生
12h a 13h30	oral/écrit	マスター1 年	上田先生

先生方からの聞き取り及び授業見学を通して、事前に聞いていた情報通りで、極めて伝統的な授業が行われていることがわかった。CEFR との関係づけは意識はされているが制度化はされていなかった。授業によっては日本並の 40 名近くで行われている授業もあり、“書く事”が重視され、フランス語で行われている授業が多かった。日本での語学教育の授業に近い。文法や解釈、分析が授業の中心となっていた。

修士課程の授業は 3 名で行われていた。これは oral/écrit ということだったのでテーマに基づいた日本語での話合いが行われており、上級レベルの授業となっていた。 CEFR と関連づけてこのような授業になっているというより、伝統的なイナルコのマスターレベルの講義なのであろう。3 名はみな高い日本語力で感心した。

今回の研究テーマとは違うが、ICT は日本語教育では活用されておらず、コンピュータ教室にはかなり古い機種が設置されていた。前述のように新校舎移転前だったので ICT の入れ替え等も遅れていたのかもしれないが、新校舎に移転して現在はどのようになっているのか今後調査が必要である。

2　パリ第 7 大学（以下パリ 7）

対応者

大島弘子（日本語学科長）

新井、夷石（日本語講師）

バザンテ（オルレアン大学、ラフォンテーヌ高校）

内容

聞き取り、授業見学、オックスフォード大学とのテレビ会議見学

日本語学科長の大島弘子氏は日本からの連絡の段階でとても丁寧に対応して下さり、日本語教

育の現状把握の聞き取り、授業見学に快く応じて頂いた。前述のように、「ヨーロッパにおける日本語教育事情と Common European Framework of Reference for Languages」の著者の一人である。授業見学の中ではオックスフォード大学とのテレビ会議を見学が興味深かった。さらには、後述する中等教育の日本語教育指導書 Palier（日本の中等教育の学習指導要領解説編に該当する）の責任者であるオルレアン大学のバザンテ先生から、中等教育での日本語教育についても詳しく伺うことができた。パリ 7 もイナルコ同様、CEFR との関連付けはまだということであった。大島先生の予想ではかなり先になるのではないかということであった。

通常の授業で見学したのは 2 年生の授業で、10 名程度の少人数の授業であった。細かい文法事項の授業で、日本人の先生が基本的にフランス語で授業を行っていたのは意外であった。写真でわかるように板書して説明するという形式である。

Fig。 1　パリ第 7 大学の授業

もう一つのテレビ会議は興味深かった。こちらも 2 年生でやはり 10 名程度である。オックスフォード大学側はマスターの学生で 4 名だった。オックスフォード大学側の日本語力も知ることができたが、やはりマスターということで極めて流暢な日本語で驚いた。

パリ 7 の方は学生によってかなり大きな差があったが、その中に一人飛び抜けてできる学生がいた。ちょうど滞在中に実施された日本文化会館主催の日本語弁論大会で優勝した学生だった。流暢な日本語に感心した。その時の大会では上位者はすべてパリ 7 の学生達だったが、その学生

は、その年に短期で日本に留学し、現在は明治大学に長期留学している。

写真ではわかりにくいと思うが、左側の壁に投影している。Polycom のシステムを使っており、これは慶應大学からの貸与品である。日本円で 100 万以上する機械で遅延もなく、綺麗な音声、画像であった。

Fig.2　パリ 7 とオックスフォード大学のテレビ会議

余談だが、大島氏の研究室は専用の部屋ではなく、別の日本語の先生との相部屋であった。学科長であっても専用の部屋ではないということだった。本棚を置くスペースも限られており、日本の研究室とはだいぶ趣が違った。フランスの大学の先生達は自宅で仕事することが多く、日本のように大学にずっといる人は少ないので、研究室が広い必要はないという話だった。

また、大島氏が非常勤講師として行っている高等師範学校（École normale supérieure）は CEFR との関連付けが進んでいるというという有力な情報を得た。総じて Grandes écoles は大学 université よりも CEFR との関連付けが進んでいるようであった。残念ながら今回の訪問先でなかった。今後調査が必要かと思われる。

3　リヨン第 3 大学

対応者

フランソワーズ・ゲール（日本語学科長）、マレー山崎ひさの（日本語教員）

授業見学はなく、聞き取り調査だけだった。

ここも CEFR との関連付けは進んでいなかった。外国語の学科長会議でも大きな話題とはなっておらず、ヨーロッパ系言語でもそれほど進んでいないのではないかという話だった。

しかし、山崎氏が非常勤講師で行っているリヨン工科大学は CEFR との関連付け、また授業での到達度の要求はたいへん強いということであった。到達目標は B1 が要求されているということであったが、漢字文化圏の日本語は基本 A2 までということにしてもらったと話されていた。卒業後ビジネス界に入るので、語学力のレベルを示す必要があり、CEFR との関連付けが強く要求されているのではないかという事であった。

(3)　初等、中等教育での外国語教育

訪問報告の前に、初等、中等教育における外国語教育についての概略を記しておく。

初等教育では 1980 年代から教育省も推進して外国語教育導入が始まり、2002 年には小学校 3 年生（10 歳）から必修となった。2005 年からは幼稚園最終学年にも導入されている[6]。英語が選択されることが多いが、英語以外の選択も可能である。

中等教育では第 1 から第 3 外国語までが選択可能である。多くの場合第 1 外国語としては英語が選択されている。

日本での中学 1 年生（以下も日本式の学年で記す）での第 1 外国語は必修で下記の中から選択する。

ドイツ、英、アラブ、アルメニア、カンボジア、中国、デンマーク、スペイン、フィンランド、現代ギリシャ、ヘブライ、イタリア、日本、オランダ、ノルウェー、ペルシャ、ポーランド、ポルトガル、ロシア、スウェーデン、トルコ、ヴェトナム語

中学 3 年生では第 2 外国語が必修で、上記に加えて下記の地方語が選択の中に加わる。

地方語のバスク、ブルターニュ、カタロニア、コルシカ、メラネシア、オック、タヒチ語

高校 1 年生では第 3 外国語か地方語を学習することができるが、これは選択で必修ではない。

このようにフランスでは 2 つの外国語学習は必修で、選択すれば 3 つの外国語を学習することができる。日本語は上記の外国語の選択肢にあるように、中 1 で第 1 外国語として選択する事も可能となっているが、実際に設置されているのはパリのラフォンテーヌ中学のみで、高校 1 年生

[6] http://www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/euro/pdf/02-2.pdf

での第 3 外国語として学習されているのが基本である。

今回訪問したリヨンのアンペール高校、パリのラシーヌ高校はいずれも第 3 外国語としての学習で、標準的な日本語学習ということになる。筆者は以前、ボルドーのマジョンディ高校、マルセーユのドーミエ高校を訪問したことがあるがこの 2 校も第 3 外国語として設置されている。

これまで調査した高等教育とは異なり、教育省のしばりが強く、CEFR との関連付けは国を挙げて実施されている。共通の基準としては下記が示されている。

Table 1　初等、中等教育での到達目標

卒業時	開始時	到達目標
小学校卒業時		A1
中学校卒業時	小学校で開始	A2
	中学校で開始	B1
高校卒業時	第 1 外国語（中 1）	B2
	第 2 外国語（中 3）	B1 - B2
	第 3 外国語（高 1）	A2 - B1

日本語の場合第 3 外国語なので A2 - B1 という事になる訳だが、文字の問題があるので達成は難しく、ヨーロッパ語学習に対するような強い指導はないという話しだった。ひらがなとカタカナ、漢字の学習なしで進める事ができないのでそこは考慮されている事である。ヨーロッパ語はここに示された基準の遵守が強く求められているということだった。訪問した 2009 年の 9 月以降はさらにそれがさらに強くなると聞いた。

日本語に関しては、日本の学習指導要領のような Palier1、Palier2（フランス教育省発行）[7]が発表されている。その作成の中心となったのはオルレアン大学のバザンテ氏で、前述のようにパリ 7 の講師でもあるのでパリ 7 でお会いし、いろいろと話しを伺う事できた。バザンテ氏は長らく日本のフランス人学校（千代田区）で日本語の指導をされていた方で、現場の事情をよく理解されていた。

興味深かった話しは、この日本語の Palier が出る前に中国語が作成されたということだった。漢字文化圏の作成は中国語が初めてだったので中国語を作成するのにははたくさんの時間と労力が費やされたということだった。日本語はそれを参考に作成したので作ることができたそうである。ヨーロッパ系の言語と同じようには作成が出来ない訳である。

(4)　中等教育の調査

リヨンのアンペール高校とパリのラシーヌ高校を訪問した。

[7] Palier1: http://www.sceren.fr/produits/detailsimp.asp?Ref=755A3146
Palier2: http://www.sceren.fr/produits/detailsimp.asp?ID=92130

アンペール高校訪問

対応者はフレデリック・バラゼール氏で、「招き猫」という日本語の教科書の著者である。まず写真をご覧頂きたい。

Fig.3 リヨンのアンペール高校の授業

フランスの学校はもっと少ない人数の授業だと思っていたのでクラスの人数に驚いた。他のクラスを見ていないので日本語の授業が人気ということなのかもしれないが、あまり日本と変わらない光景である。一番後ろの方までほとんどいっぱいで、私はあいていた一番後ろの席に座った。いくつか席があいていたが、後述のように遅刻者がいて私の座っている席を除いてすべてうまった。

授業は基本的に日本語で行われ、細かいニュアンスの説明の時だけ一部フランス語で解説していた。漢字への興味は強く、生徒に要求されて先生が黒板に漢字を書く事も多かった。

冒頭で、先生がゲストである山崎先生はフランス語はわからないのでフランス語で話してはいけないと生徒に伝えて授業を開始した。いくつか質問を受けたが、最初に「山崎は」と質問しようとした生徒がいて他の生徒の笑いを誘い、先生にも注意され、”désolée（すみません）”と謝罪するというおもしろい場面もあった。賢い生徒がいて、日本では何をおしえているのですかと質問され、フランス語と答えざるを得ず、最初のフランス語がわからないという先生の話は嘘だと

わかる場面もあった。

また、先ほど書いたように遅刻者があり、3 名別々に遅れて入って来たのだが、教室の入り口で「遅れて申し訳ございません」と 3 回言わないと中に入ってはいけないという規則らしく、入り口で 3 回繰り返すのはおもしろかった。

私が Colibri の創設者だと先生が紹介すると、みんながお礼を一斉に言うという場面もあり、日本語を選択する生徒は日本に興味がある訳なので、日本人的な気質も持っているように感じられた。

疑問点はすぐに質問するというフランスらしい授業だった。

正直、そこまでに見てきた高等教育の授業よりも活気があり、生徒も熱心に思えた。パリ 7 のコンクール優勝者は別だが、クラス全体としてはこちらの方が熱心で活気があるように見えた。一回の授業見学なので感想のレベルだが。

リヨンにある学校の中でもアンペール高校はいわゆる“進学校”で、先生の話では、大学で日本語を専攻する学生はあまりおらず、すでに高校で日本語を勉強しているので大学ではビジネスや理数に進む学生が多いと言うことだった。

前述のように授業は日本語で行われ、極めて実践的な授業だが、先生と生徒のやりとりで授業が進むという点では日本の授業のような感じであった。

ところで、それまでにも何度もフランスの高校を訪問したことはあったのだが、生徒の登校時間の訪問は初めてであった。フランスは日本のように 18 歳以下の喫煙が禁じられていないので高校生がたばこを吸うことができる。校内ではさすがに禁じられているということだが、なんと入り口に灰皿が設置されており、何人もの生徒がそこでたばこを吸い、灰皿に吸い殻を入れて校内に入っていく。日本では考えられない異様な光景である。日本語教育とは関係ない話だがたいへん驚いた。また昼食のために外に出て行ったり、授業がない生徒は遅く登校してきたりと、日本とは異なることがあり、興味深かった。

ラシーヌ高校

最後の授業見学はラシーヌ高校だった。先のアンペール高校もいわゆる進学校であると書いたが、ラシーヌ高校はパリでも有数の進学校である。

担当者はナディーヌ・ネルヴィー氏で、Colibri の中でも中心的な役割を担っており、2009 年に国際シンポジウム[8]を行ったときには、Colibri のパネリストとして語ってもらった。Colibri の意義については「同じ年頃で異文化を持つ若者たちの普段の日常生活を体験できたという点で、明らかにプラス面が大きい。日本での生活を夢見る生徒達にとってコリブリの留学制度は、学習に大きなモティベーションを与えている。」とシンポジウムの報告集に書いている。また、ネルヴィー氏は前述の Palier 日本語の執筆者の一人でもある。

授業見学だが、指示された時間が遅く、まるで放課後の補習授業のような時間だったのでいさ

[8] 2009 年 7 月 26 日「東アジアの中等教育におけるフランス語」早稲田大学国際会議場　報告集は「いかに 21 世紀の複言語能力を育てるか －中等教育における外国語－（仏・独・日・韓・中）」，2010，朝日出版社

さか不思議だったのだが説明を聞いて納得した。全ての学校に日本語の教員がいる訳ではないので、ラシーヌ高校の日本語の授業は他の学校の生徒も来て合同で授業しているということだった。その為に他の学校での授業が終了し、さらにラシーヌ高校まで来ることができる時間に授業時間を設定しているという制度である。これは LIE（Langues Inter-Etablissement　学校間言語教育）というパリ特有の制度で、23 校が加盟しているということだった。LIE の加盟校で日本語教育を実施しているのはラシーヌ高校だけということだ。

見学した授業は 10 人少しで行われていたがたいへん熱心であった。基本的に日本語で授業し、細かいニュアンスをフランス語で少し説明していた。

レストランの店員と客の会話場面の授業だった。最初に先生の説明があり、全体で練習した後、2-3 人のグループに分かれて練習をする。店員の方がたくさん話さなければいけないので難しい。感心したのは、グループに分かれた後、難しい方の役割を希望する生徒がすぐに出て練習が始まったことだった。全くものおじせずに、練習を進めていた。

いろいろ見学した授業の中で最も CEFR の考えを実践している授業だと思えた。

Fig. 4　パリラシーヌ高校の授業

2.3. 成果及び今後に向けて

高等教育に関して、今回の訪問及び聞き取り調査で分かった事は次の点である。

1. 今回の調査校（イナルコ、パリ第 7 大学、リヨン第 3 大学、コンピエーニュ大学）の日本語教育については CEFR との関係づけは進んでいなかった
2. 今回の調査の対象ではなかったが、一般的にヨーロッパ系の言語では CEFR との関係づけが進んでいることがわかった。
3. 漢字文化圏の言語の学習をヨーロッパ系の言語と一律に扱うのは無理があるというのが日本語教育関係者の意見だった
4. 大学よりも Grandes écoles の方が CEFR の関係付けが進んでいる事がわかった。今後の調査の対象である

大雑把に言って、高等教育の日本語教育では、予想よりも CEFR との関連づけが進んでおらず、また授業も読み書きに重点が置かれている講義が中心という印象を持った。しかし、その中でもパリ 7 の日本語コンクール優秀者のように、短期間の学習とは思えない流暢な日本語力を持つ学生もおり、また電子会議の活用など興味深い講義もあった。上記に書いたように大学よりも CEFR との関連付けが進んでいると思われる Grandes écoles を見学するとまた違う面が見えてくるのではないかと思われた。

またイナルコの移転した後の状況も興味深い。

中等教育に関しては次のようなことがわかった

1. CEFR との関係づけは高等教育に比べて進んでいる。これは中等教育に関しては教育省の管轄下にあり、教育省の指示で統一した教育が行われるからであろう。
2. CEFR と関連づけられた学習指導要領も作成されており、最終的な到達目標も設定されている
3. 日本語のような漢字文化圏の言語は文字の学習に時間がかかり、到達目標についてはその点が考慮されている
4. ヨーロッパ系の言語については 2010 年の 9 月からの学期で CEFR との関係づけが公的には義務づけられている。今後の調査が必要である。

生徒達の熱心さ、積極性に驚いた。Colibri で留学してくる生徒達の感想の中に日本では授業で寝ている生徒がいて驚いたという感想が時折出るが、見学した授業で寝ている生徒は誰もいなかった。ともかくたくさん日本語を話し、アンペール高校のように、たくさん漢字を学びたいと思っている。再度見学しにいきたいと思えた。

3. 先行事例（大阪大学外国語学部）

大阪大学外国語学部（旧大阪外国語大学）は、日本の大学での CEFR 導入校としては最も先駆

的な大学の一つと言えるだろう。既に、2005 年には、25 の専攻言語で、1、2 年次の専攻語実習教育（年間授業時間数 90 分 X 5 コマ X 30 週）での到達度目標策定の具体的作業を開始し[9]、後述するように現在は 4 年間の到達度目標が設定されている。

3.1. 経緯

このような先進的な試みに至るには背景があることが大阪大学真嶋氏（日本語教育）に伺うことでわかった。

到達度目標導入の検討を始めた当時は大阪外国語大学であった。大阪外国語大学と大阪大学の合併の話はその時点で進んでおり、合併しても特色ある学部として再スタートするために全教員が大きな目標をかかげ、一丸となって進むことができたということである。危機的な状況で大きな改革を進めることができたと言えるのかもしれない。逆に言うと現在の体制で大きな支障がない大学の場合、同じように全教員が一丸となって進むことにはいろいろな障害があるのだろうと感じられた。

3.2. 現状

現在は、25 専攻言語ですべて到達目標が設定されている。

学生の要覧にはその一覧表が載っており、学部のホームページ[10]でも見ることができる。外国語学部の「高校生・受験生の方へ」というページの「専攻語について」というところに掲載されている。表記も工夫されており、世界地図をクリックすると専攻語の到達度目標記述に飛ぶようになっている。

学生向けの説明を引用しておく。

「到達度評価制度とは

外国語学部では、専攻語教育に関して、2007 年度より「到達度評価制度」を取り入れています。次ページから、25 専攻語毎に 1 年次、2 年次、3・4 年次に分けて提示しています。その特徴は、以下のとおりです。

•言語学習の「聞き、話し、読み、書く」の 4 技能のうち、「話す」は「やりとり（対話）」と「表現（独話、発表等）」に分けて考え、計 5 項目として記述してあります。

•各専攻語の提供する専攻語教育において、何が目指されているのかを示してあります。

•目標の記載は、否定形を使わず「～できる」という能力表現（Can-do Statements）で記述してあります。

•ここに記載されているのは、基本的に本学の専攻語プログラムをきちんと履修すれば長期留学をしなくても 6 割以上の受講生が到達できる目標と考えられています。

•この到達度目標の枠組みは、欧州評議会が 2001 年に発表した CEFR（Common European

[9] 林田理恵，真嶋潤子他（2005），『語学教育における到達度評価制度確立のための調査・研究』
[10] http://www.sfs.osaka-u.ac.jp/user/kyoumu/ns/st.html

Framework of Reference for Languages ヨーロッパ言語共通参照枠）を参照してあります。（専攻語によっては、内容的に CEFR を参照していない場合もあります。）

自分の専攻語の目標を見定めて、自分の言語能力を技能別に把握しましょう。卒業時点での目標はもちろん、生涯にわたる自分の専攻語の到達目標を考えて、各段階で自分自身の納得する到達目標を立てましょう。そのような生涯学習の中の位置づけに基付き、学習目標や方法を主体的に考えて「自立的学習者 autonomous learner」になりましょう。そのためにこの表を活用してください。」

CEFR を参照していることが記されており、「生涯にわたる自分の専攻語の到達目標」という記述がある。自分の言語の生涯学習の中での大学という位置づけになっている訳である。

真嶋氏の話では、到達目標はすべての言語で作成されたが言語によってばらつきがあり、実践の中で改善していくということであった。先進事例として今後も注目される。

4. 調査を終えて

今回は文献から得る情報ではなく、あくまで現場で見聞きし、実際に行われている授業を通して筆者が感じたことを中心に記した。短期間の調査なので一面しか見ていない事もあるかもしれないが、現場にこだわった記録として記した。

このような調査は経年変化を見ていくことが重要である。文中に何度も「今後の調査が必要である」、「今後も注目していく必要がある」と記した。その意味で 2010 年の現場からの報告という位置づけにして、今後の調査に活かすことができればと考えている。

＜参考文献・関連サイト一覧＞

立花英裕，山崎吉朗他（2009）『いかに 21 世紀の複言語能力を育てるか —中等教育における外国語—（仏・独・日・韓・中）』，朝日出版社，pp. 1-144

富盛伸夫(2009),「ヨーロッパ連合（EU）における高等教育改編と言語教育改革の問題点について」『外国語教育研究』外国語教育学会第 12 号，pp.102-1 10

林田理恵，真嶋潤子他（2005),『語学教育における到達度評価制度確立のための調査・研究』平成 17 年度大阪外国語大学学内特別研究費Ⅱ活動報告，大阪外国語大学教育推進室語学教育ワーキンググループ，pp.1-81

真嶋潤子(2007), 「言語教育における到達度評価制度に向けて —CEFR を利用した大阪外国語大学の試み」『間谷論集』創刊号，日本語日本文化教育研究会，pp.3-27.

吉島茂、大橋理枝(訳・編)(2004)『外国語教育 II-外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ 共通参照枠』朝日出版社，pp.1 - 251

======

・国際交流基金編(2005)
「ヨーロッパにおける日本語教育事情と Common European Framework of Reference for Languages」

(www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/euro/pdf/ceforfl.pdf), PDF 版
・東京外国語大学国際学術戦略本部「世界の高等教育動向リンク集 —ボローニャ・プロセス—」
（http://ofias.jp/j/strategy/bologna.html）
・総合科学技術会議(平成 21 年 8 月 5 日)資料 4-3「欧州の大学・大学院教育の動向」
（http://www8.cao.go.jp/cstp/project/jinzai/haihu6/siryo4-3.pdf）
・ヨーロッパ日本語教師会
（http://www.eaje.eu/cefrproject.html）
・日本語教育全般に関する情報（教育機関検索もあり）
（http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/area.html）
・フランスの日本語教育に関する情報
（http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2009/france.html）
・JF 日本語教育スタンダード
（http://jfstandard.jp/top/ja/rende.do）